

新聞配達

田中浩司

朝早くから新聞配達をしながら、お客さまの玄関の横に、もう読んでしまった古くなった新聞が束になって置いてあるときがあり、それを親切のつもりで会社までもって来ていたときがあった。

会社にもって来ると、正社員は親切に「倉庫に置いておいてください」と言う正社員もいるが、なかには強めの口調で「どこの家からもって来たんだ。倉庫へ置いておけ」と言う正社員もいる。そして、「田中さん、もとの家へ返してくれ」と言う正社員もいる。

今朝、あるお宅の玄関の横に、新聞の束が置いてあった。私は、はっと気付いた。我々がお客さまからお金をいただき、新聞を買ってもらっているのに、その新聞をもつていったら、お客さんにお金を返さなければならないではないか。このお宅のお客さんとは、いつも新聞を配りながら会えば仲よく立ち話をする。私は、お客さんに怒られてもいい。バイクでその場を去った。

我々は、冬の雨の日も、大雪の時も暗闇の中、バイクで配達をしている。なかには交通事故で身体障害者になってしまった人もいた。せっかく配った物も束にして出されたら困る。

新聞記者は、ロシアとウクライナの戦争、中東での戦争を死にもの狂いで取材して記事にしている。いくら読んでしまったからといって新聞を捨てられたら困る。お客さんが亡くなった後も新聞は家の中に保存しておいてもらいたい。もう十八年も新聞配達をしているのだからプロ意識を私は持たなければいけない。

新聞配達をしながら、高齢者がよく歩いている姿を見かけるが、悔しくて仕方がない。朝、早く起きてても何もすることがないから歩いているのだろけれど、私は六十四歳でも仕事をしている。新聞配達の仕事が好きだけど、やはり生活のためである。働かなければごはんを食べられない。

以前から母は、「あたしが死んだら、この箱の中に、印鑑と通帳や書類があるから、使えよ」と言い、よく見せてくれた。

しかし、その箱が入っている戸を開いてみても箱がみつからない。母に聞いたが、もう認知症になっている。父は知らん顔をしている。父が捨てたんだ。私は死ぬ寸前まで働か

なければならぬ。

父は、私にひどい虐待をしてくる。長年飼っている亀の水槽に消臭液を入れられてラベ
ンダー色に染められてしまった。亀は無事であった。

新聞配達中、つかまえて来た小さなミドリガメを殺されてしまったときもあった。父の
車の隣に私の自転車を置いていたとき、半年の間に、十回もタイヤをパンクさせられてし
まった。怖くなり、今はアパートで一人暮らしをしている。そんな困っている私の顔を見
て父は楽しんでいようだ。

そしてシニアカーに乗って私の住んでいるアパートまで追い掛けて来る。十分間、戸を
叩き、「おい。おい」と言っている。私は鍵をしめ父が帰るまでじっとしている。

実家にいたとき、父は私に聞こえるような大きな声で、母に「古い新聞は浩司が会社へ
もって行ってくれないから、自治会に出すぞ。そうすれば組に金が入ってくる」と話して
いた。

新聞配達中、後半になると、疲れが出て来るので、自分なりに休憩場所を決めて
いて、その自動販売機で缶コーヒーを買い、地面に座り休んでいる。

いつも通りかかる高齢の女性が私に話し掛けてきた。「新聞屋さんが行った後、あそこ
にいる自転車に乗ったおじさんが、自動販売機のおつりの中を指で探しているんだよ」と。
私はなんの楽しみもないので、それから十円をおつりの所へ入れておくようにした。お
じさんの自転車とバイクと擦れ違っても私は知らん顔して擦れ違う。

十円ではものたりないので、五十円をおつりの所へ入れた。新聞を配りながらバイクを
おじさんが自転車で追い越して行った。そして、私に聞こえるような大きな咳をした。

面白いので、今度は百円を入れた。次の日、おじさんは私のバイクに擦れるくらいの位
置まで来て、擦れ違って行った。私は知らん顔をした。

もうこれでやめた。お金ももったいない。あのおじさんは、そんなにお金に困っている
のだろうか。もしかしたら生活保護を受けているのだろうか。私は、相変わらず新聞配達
員だが。